

最近のインドはITの国として知られ、インドにおけるIT産業の発展は、しばしばインド人の数学的頭脳の強さによるものとして説明されている。それと関連して、彼らの計算力の強さが注目され、その数学教育への関心も高まっている。でも、それは単に、数学的頭脳だけの問題なのだろうか。

今から二〇年ほど前、私はチェンナイ(旧マドラス)で、日本のある家電メーカーの技術者と一緒になったことがある。その人は、当時もてはやされていた「フাজィ論理」についての講演をしに来たのだが、彼によると、この論理は日本で人に話しても、なかなか分かってもらえないのだが、インドの人たちは、皆よく分かってくれた。不思議に思つて、その理由を聞くと、「この論理は、インド哲学で説かれるのと同じで、だから自分たちにはすぐ分かる」という答えが返ってきた。「先生、そんなんですか」と聞かれたが、残念ながら私には、フাজィ論理そのものが、「曖昧さ」の論理ぐらいしか分かっていなかったので、そのときは、どうも答えようがなかった。

ここでインド哲学に関連して言えば、ヒンドゥー教的な神話世界において、神様は、シヴァ神、ヴィシヌ又神をはじめとして、たくさん存在している。そして、パールヴァティーがシヴァ神の妃だ、ガネーシャがその息子だとい

プロフィール

東京生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学名誉教授・大正大学名誉教授。インド刻文学会会長・国際タミル学会会長・日本南アジア学会理事長・日本学術会議会員等を歴任。著書 *History and Society in South India* (New Delhi, 2001) により、日本学士院賞を受賞。文化功勞者。



インド哲学とIT産業

からしまのほる
辛島昇

のは、神話での設定として、それなりに理解されるのだが、有名な叙事詩『ラーマヤナ』の中で実在的存在として描かれているラーマが、実はヴィシヌ又神の化身だ、などと言われると、その変幻自在振りいささか戸惑いを感じる。多少の知識なら我われももっている「梵我一如」ということにしても、「梵」が宇宙原理、「我」が個人としての自己だというのはいい。ただ、それが、実は、その両者は同じもので、そのことを悟ることによって解脱できるのだ、と言われると、やはり戸惑ってしまう。

この、「実は」というところが曲者で、インド人の数学的頭脳も、単に計算力とか、正確さだけが優れているのではない。科学においても、どんなことにおいても、現実の世界においては、「実は」ということがあるのだということを、インドの人々は、哲学や神話から学び取っているのであらう。正確さだけを求めるのではなく、曖昧さをも認める、二枚腰的思考の柔軟性がインドの人々にはあり、そのことが、IT産業の発展をもたらししているのではないか。インドIT産業の雄「インフォシス」のムールティ名誉会長が重視する「変化への対応」も、それを意味しているに違いない。

月刊
みんな
1月号目次

1 エッセイ 千字文
インド哲学とIT産業 辛島昇

2 特集 **ウサギ**

- 3 ベトナムの卯年 大西 和彦
- 4 ウサギの意匠 岩崎 均史
- 5 アメリカン・ラビット 巽 孝之
- 6 アリスと地下世界 宗宮 喜代子
- 7 玉兎のマカオ館 中牧 弘允
- 8 兎狩りをめぐる民俗 天野 武
- ウサギ料理の「トラウマ」 宇田川 妙子

10 研究フォーラム
内陸アジアの宗教復興
藤本 透子

12 みんなく Information

14 地球ミュージアム紀行

寧波滕頭実践例館
上海万博より
横山 廣子

15 みんなく 私の逸品

蚊取り線香
吉田 晶子

16 散策と思索の径

スリンの〈異世界〉を逍遙する
津村 文彦

18 多文化をささえる人びと

日本語を伝え多文化を教わる
——甲南大学日本語教室「あおぞら」
金 美善

20 歳時世相篇

年賀の薦樽
近藤 雅樹

22 フィールドで考える

ミャオノモン女性をとりまく刺繍と文字
宮脇 千絵

24 次号予告・編集後記